海外学界ニュース

フランス佛教学、日本学についての雑感

白土わか

フランス東洋学、佛教学の現状については、一九六六年はじめ、来日中であったP・ドミエヴィル教授による大谷大学における講演が、大谷学報46巻3号にのせられて、ヨーロッパ、とくにフランス学界の現状が俯瞰的に、しかもフランス東洋学の最高峰たる教授の識見をもって紹介されている。又、東方宗教27・28・30号には福井文雅氏によって、一九六四年まで三ケ年にわたる留学生活による見聞が広く委細に懇切に、フランス東洋学の近況—中国学を中心として—として紹介されている。以上によってフランス東洋学の現状の大体は知り得るものと思われるが、私は一九六五年十月より二ケ年間に見聞しえたフランス佛教学・東洋学ならびに日本学について、身近かにふれた印象のままにしるして報告の一端にしたいと思う。

留学とはあらゆる意味において異質なるものにふれることであり、いわゆるエトランジェの体験をもつことである。この様な学界ニュースの紙上をかりていうことを許して頂きたいと思うが、渡佛後間もない病院生活は、強烈なヨーロッパ人の性格にじかにふれることであり、又、冷酷なまでの合理精神と、それにもかかわらず、人間共通の心の場をみたことであった。そのとき、遥かに想う日本は、いかにうまし国のなごやかさをたたえていたことであったろうか。フランス人に慣れ、フランスの風土になれるにしたがって、エトランジェとしての目にうつったフランスの実社会は、それはそれなりの事情ものみこめ、背後の思想、宗教への理解も次第にわかってきた。しかし、渡佛後ただちに接触した教授たちや学友たちとの交わりは、はじめから暖い、また遠慮がちな思いやりのあるものであった。なつかしい想い出をもって私はいつも、教授や諸学友のあれこれをおもうのである。

ソルボンヌ・オートゼチュードの教授と講義

ソルボンヌにある École Pratique des Hautes Études[1]は、第四部門が、sciences historiques et philologiques であり、佛教学、東洋学、日本学関係の講義は大体ここで行なわれる。第五部門の宗教講座もあるが、第四部門の歴史、文献学部門に大体が入っていることは、まずフランス佛教学の特徴を示しているといえると思う。

ルイ・ルヌー Louis Renou 教授は一九六六年八月物故されたが、先生のオートゼチュードにおける講義はヴェーダやパーニニ文典等であった。聴講者はストラスブール大学の Malamoud 氏やインドの Bhattacharya 氏（CNRSフランス国立中央科学院研究員）等をはじめ、いつも七、八名。パーニ

ニ文典の一部には私も聴講出席したが、目を閉じて淳々と説きさる先生が、時として急にこちらをむかれ、後の佛教の論書の中にパーニニの論理が入っているのだと指摘され、日本からの留学者に語りかけようとされるのであった。私はひきつづき先生の講筵に列し、サンスクリットの知識の一端をも身につけたいとねがっていた。しかしあの重厚な碩学は、盲腸炎の手術の余後、ノルマンディーの田舎でヴァカンスの間に急逝されてしまった。先生の業績は今さらここにいうまでもないが、②インド学者の先生が日本をこよなく愛されたこと、それを先生みずからの言葉から、又、未亡人となられた M.-S. Renou 夫人の口からよくきかされた。M.-S. Renou 夫人には Conze の Buddhism のフランス訳 Le Bouddhism dans son essence et son développement (payot) がある。先生はかって東京の日佛会館館長であられたし、先生のお話には辻直四郎先生のこと、大地原助教授のことがよく出て、又、山口益先生の安否をお会いする度毎に問われたのであった。大地原助教授とは Kaśikā-vṛtti の共訳の仕事を続行中であった。ノルマンディーの野の中の先生の墓前にまいったとき、Louis Renou, Membre de l'Institut と刻まれた質素な墓石の上にはバラが植えられてあった。

ルヌー先生のあとをオートゼチュードでつがれたのは、P・フィリオザ Filliozat 氏である。J、フィリオザ教授の御子息にあたる。ソルボンヌの方をつがれたのはカイヤー Caillat 女史。オートゼチュードとソルボンヌで、サンスクリットの講義を提携しあって、文法や文学をやっておられる。

アンドレ・バロー André Bareau 教授は、パーリ語佛典や漢訳佛典の講読をつづけておられる。涅槃経や Vinayapiṭaka, 又、時には密教の儀軌等を、学生の要望に答えてよんでいられた。学生の中には、ルーヴァンのラモット師のもとにいた学生もいたし、篤学なフランス人学生の中に交って、タイ、ヴェトナムからきた人たちもいた。ラモット師の声望は今ここにいうまでもないが、学生はルーヴァン、パリとゆききがあるようであった。バロー教授はみるからに篤実な学究であり謙虚な人であった。次々と著作を出され、Recherches sur la biographie du Buddha dans les Sūtrapiṭaka et les Vinayapiṭaka anciens. (École française d'Extrême-orient, 1963) 又、Les religions de L'Inde III (Bouddhism) (payot, 1966) その他、文庫本の Bouddha を店等でよくみかけた。

J・フィリオザ Jean Filliozat 教授は多角的なインド学者で、佛教は密教のタントラからイコノグラフィー、佛教寺院建築に至るまで講義をされている。L'Inde classique の編纂・執筆。講義はソルボンヌ・オートゼチュード、コレジュ・ド・フランス、また、ポンディシェリーにおいて、カンボジャのプノンペンにおいてと席あたたまる暇なく、活動的に Société Asiatique の席上に等々、多才を発揮されている。オートゼチュードでは、密教の儀式に関するテキストや寺院建築の Prasadamandana を読んでいられた。講義にはチベット佛教学のマグドナルド Macdonald 女史、イコノグラフィーのベニスティ Bénisti 女

史、マルマン Mallman 女史らをはじめ、インドのブハッタチャルヤ氏等十名ほどがいつも出ている。私が出ていったときベニスティー女史は、「今年の講義は、佛教学にはあまり関係がないのですが」といっていられた。フランスの佛教学の現在の傾向の一端を示しているように思われる。しかし、あくまで実証より入ろうとするフランス合理精神のあらわれのようでもある。教授が、カンボジャへ一寸の間にいってこられては撮ってきた佛塔の写真を見せられ、みな興にのってあれこれさわぐのも、造型や美術に敏感なフランス人らしかった。中でもベニスティー女史はそのようなとき、フィリオザ教授の説に対し、助言と主張をよくなしたものであった。

M・ラルー Marcelle Lalou 女史は一九六五年までオートゼチュードにおられたが、停年退職、そのあとには前記の A. Macdonald 女史が、チベットの佛像について、又、十四世紀のチベット人の記録について等を講じている。マクドナルド女史にはチベットのマンダラに関する著作③がある。ラルー女史は今年一月逝去されたが、ここ二、三年病気がちで、ビブリオグラフィー・ブッデイックの仕事もその中ですすめられていた。この仕事の後継者が仲々ないと、かこっていられたが、マルタン・デュ・ギャール Martin du Gard 嬢が、よく身辺にあったし、その辺で今後の仕事はつづけられてゆくのでないかと思う。彼女とはコレジュ・ド・フランスのスタイン教授の講義でよく一緒になった。「チボー家の人々」の作家、マルタン・デュ・ギャールの姪にあたる。ラルー女史はパリ国民書図館のチベットのマヌスクリを整理して、Inventaire des Manuscrits tibétains de Touen-houang を出され、パリオ将来本に照明を与えられたが、厳粛な女流学者であった。私には大学のかえりに電話をかけて先生の御宅に始終くるようにと仰言って下さったのに、病身がおつかれになるからという身辺の方の配慮もあり、度々お邪魔もせぬ中、亡くなられたのはさびしい気がしてならない。せめて御存命中、先生のお話をうかがえたことをもって喜びとし、あの女流学者の冥福をいのるばかりである。先生からは、お話の片々の中に、私は示唆と御教示を頂いているのである。ドミエヴィル先生やスイスのレガミー教授らとの親交のさまもうかがえて、古い立派な学者の系列に入っていられた。山口益先生のお話も屢々でたことはいうまでもない。

オートゼチュードには以上の他に、インド学関係の講義は二、三あり、サンスクリット文学関係のものである。それらインド学、佛教学の講義は、いずれもソルボンヌ内のインド学研究所で行なわれていた。廊下より更に低く階段を降りた室には、更に四つほどの小室がまわりに附属していて、それらはフーシェ、シルヴァン・レヴィ、セナールとかの室となっていて、いずれもそこには、それらの学者の蔵書がおかれていた。ルヌー先生はそこの主任をしておられたが、いまはフィリオザ教授である。

インド学研究所とすこし隔てて、中国学研究所があり、ドミエヴィル先生退官後は、蒙古学のアンビス Hambis 教授が主任である。中国学関係のことに関しては福井氏が、委細に報告されている。

インド学と中国学研究所とは、両どなりにあっても日本学研究所は未だなく、その設立は一両年のうちに実現するときいているが、現在そのオートゼチュードの講義はソルボンヌの二階左の建物で行なわれている。

アグノエル Haguenauer 教授は、日本学者として、オートゼチュードでは日本文学の他に日本佛教をも担当されていたが、最近では実際は日本佛教の方は同教授によってなされていなかったようである。教授の本領は言語学にあって、国語学（日本の）を、中国語、朝鮮語、蒙古語等々との比較からきかされると、時にかなわなくなってきて、これがヨーロッパの学者のつよみであろうかと思った。日本語の性格を、思い知ったと思ったこともあった。

アグノエル先生も昨年停年となられ、そのあとにはフランク Frank 教授がある。同氏は今昔物語のフランス訳をいよいよユネスコより出されたと、最近、消息をうけとったばかりであるが、日本文学研究を本領としながら、日本人の佛教信仰史に深い関心をもっている。日本人の心情による佛教のうけとめ方にユニークな見解を示している。オートゼチュードの講義は、今昔物語や三宝絵詞、大和物語等。今年はイコノグラフィーで日本の諸尊像をとりあげている。中国の方はソワミエ Soymie 教授がうけもって、その共同の仕事である。今夏、その仕事のため来日の予定である。パリの日本学は、中堅のフランク教授を中心につよくなりつつある。東洋語学校のシッフェル Sieffert 教授には世阿弥の能楽論のフランス訳あり、また新進気鋭の日本学者が輩出してきている。エラーユ Hérail 嬢も東洋語学校に教鞭をとっているが、日本歴史専攻。古代経済史をやったが、鋭い史眼をもっていて、今は御堂関白記をよんでいるが、その中の佛教に関する項目は度々質問されて、それは佛教学辞典には出ていないことばかり。今さらながら実際に調査せねばならぬことの多いのを考えさせられた次第であった。また日本の佛教学者の書いたものと、ラモット師のものとをあわせよんで、読後感をきかされたが、ヨーロッパ人のもつ基礎学力にはさすがにと思われることが多かった。その他、日本学にはオリガス Origas、マイス Mais 氏らの有為な青年たちがある。オートゼチュードも東洋語学校も、聴講者は両方、任意にきく事ができて、フランク氏の講義には東洋語学校からもきていたが、ダヴィッド M. David 女史（前チュルヌスキー博物館副館長、CNRS研究員）や、オシュコルヌ Hauchecorne（ギュメ博物館図書室長）女史がいつも出席して、そのときはみなよく話し、夕方のパリの町をつれだって帰ったのも、いまはたのしい思い出である。

オードゼチュード第五部門は sciences religieuses であるが、キリスト教神学やアフリカ等の諸宗教が主なる講義内容である。東洋の宗教としては、スタイン R. Stein教授の中国、チベットの民間信仰についての講義がある。日本の宗教は、前記アグノエル教授によって実際は休講となっていた。

コレジュ・ド・フランス Collège de France

ドミエヴィル先生は、故ルヌー先生と相並んで、東洋学界の栄誉をになっておられたが一九六五年退官、そのあとにはアンビス教授がおられるが、なおジェルネ教授のあることも忘れられない。「古代支那」（福井氏訳、クセジュ文庫）の著者である。コレジュ・ド・フランスで講義されるのはアンビス教授である。講義は中央アジアの歴史と文化である。

スタイン教授は一九六六年、コレジュ・ド・フランスに入られたが、中国及びチベット学を講じ、ドミエヴィル先生退官後、光を放っておられる。あの就任講演の夕、コレジュ・ド・フランスの大教室には多彩な人々が集い、二時間にわたって説きつづけたスタイン教授の博学と迫力とは充分に人々を感動せしむるものであった。宗教社会学ともいうべきものを方法論の中に導入して、チベット、中国、日本、ヴェトナムとかけずりめぐっての講演であった。その夜、ヴェトナム人のスタイン夫人が聴衆の中央に出席していたのも印象的であった。教授のコレジュ・ド・フランスの平素の講義はチベットのコスモロジーと唐蕃会盟碑の読解の二であるが、その講義のために十年間の研究の内容をつぎこんでしまったといわれる。聴講者は十数名内外。ゼミナールのような形式にみえるが、コレジュ・ド・フランスでは、教授にむかって質問その他一切は禁ぜられている。文字通り、最高学府の形式をとっているのである。一般公開でありながら。スタイン教授の講義にはマルタン・デュ・ギャール嬢もくるし、又、今年秋、法宝義林の仕事のために京都にくるサイデル Anna Seidel 嬢もいる。スタイン教授の講義はチベットから日本へヴェトナムへ縦横無尽、その迫力は定評があり、ドミエヴィル先生のあとをうけて、フランスの東洋学の最高峰に達するのであろうといわれる。が、一旦、近くに接してお話をするときは、何と人なつっこい先生であったろう。たまたま隣席で夕食をした折、酒は一滴ものまれず水ばかり。最後のコーヒーも夜ねむれないからとのまれずであった。大谷大学西蔵大蔵経影印版の仕事の話が出た折、先生は、ああ恐るべき仕事だといわれた。そして、つけ加えられた、東洋文庫のチベット文献も出してくれたらと。私はパリの国民図書館の膨大な東洋部資料を思いうかべていた。ゆきとどいた北京版西蔵大蔵経の保管、中央アジヤマヌスクリプト断簡の調査、ペリオ将来敦煌遺品等々。それらは大事に保管されているのみである。勿論、閲覧には至極親切であるけれども。

ミュス P. Mus 教授は連年つづけてイコノグラフィーの講義をつづけておられる。Le stupa et la transmigration と題して。造型学より仏教哲学に入りこまれたのである。サンスクリット、パーリ、中国語、日本語等よく読まれることはいうまでもない。イコノグラフィーと経典読解から、ひらめきのように仏教哲学が発出する。ミュス教授の独壇場である。その聴講者は多くて、いろいろの人にそこで会い、また紹介されたりする。前記ベニスティー夫人は、この講座の最後にジャワの仏像や遺跡を映写、説明したりする。ミュス教授の方法については、今後、その著作をよくよみ考えてみたいと思わせられるものである。

フィリオザ教授はここでは、タムール語の文献の解読を行なっているようである。

国民図書館 Bibliothèque National の東洋部には、敦煌のペリオ将来の遺物や中央アジヤのマヌスクリプトを多く蔵し、ギニャール Guignard 女史が、東洋部の部長であり、ペリオの義弟が、ペリオ将来文書の整理にあたっている。又、中国人の呉其昱氏もそのことにあたっているが、愛想のいい呉氏には幾度も、大谷大学から北京版西蔵蔵経のカンジュール目録が出るのはいつですか、まってるのですよ、といわれたのであった。その閲覧室の中二階で、影印版西蔵蔵経をみたときは、えもいわれぬ感慨をもったものであった。

ギュメ博物館 Musée Guimet は周知の通り、ルーブルの東洋関係のものを蔵している博物館であり、バコーやアッカンの収集品にお目にかかる。又、図書室を有し、その室長はオシュコルヌ女史。地味な誠実あるお人柄に、どれほどお世話になり、又、教えられることが多かったであろうか。ギュメ博物館には研究員ベニスティー女史、マルマン女史、館長オーボワイエ J. Auboyer 女史ら等々あり、全く女性のみの城となったのはどうしたわけであろうか。マルマン女史にはイコノグラフィーの観音の研究④がある。又、ギュメからは年々書物が刊行されていて、マスペロ H. Maspero の Histaire et Institutions de la Chine Anciene が最近には出ているが、Annales du Musée Guimet として一八八〇年以来、続刊されている。雑誌は Revue de L'Histoire des Religions と Arts Asiatiques があり、ソルボンヌやオートゼチュードの学術雑誌にあたるといえよう。

書物について附言すると、ビュルフの法華経 Lotus de la bonne loi やシルヴァン・レヴィの L'Inde Civilisatrice 等が復刊になるはこびとなっている（Adrien-Maisonneuve）。又、ルネ・グルッセの Sur les traces du Bouddha⑤は、本屋の店頭でよくみかけた。

アジヤ協会 Société Asiatique

月一回の催しには二名ほどの研究発表があり、雑誌 Journal Asiatique を出している。研究所には蔵書も古いものがあり、ハミルトン氏らがいる。

東洋語学校 Ecole Langues Vivantes Orientales

東洋語学校については、さきにも少しふれたが、勿論、ひろい意味の東洋語の学習が行なわれるが、日本語科の学生は近年とみにふえ、十名内外であったものが、一学年のみで数十名になっているという。これは何に由来するのであろうか。森有正氏もここにおられる。

以上、身近かにふれた点のみの概述であるが、佛教学は、文献学として、又、イコノグラフィーの上から把握されようとさ

れ、密教を重視することも事実である。文献学として、サンスクリット文献を、チベット文献を中国文献を、又、日本文献を徹底的に統解しようとし、イコノグラフィーの実証を重んじ、ひろく的確な佛教の性格、様相をつかんでゆこうとしている。佛教そのものの精神は、更にいかにしてそこにもたされるべきなのであろうか。東西の交流の必要をつよく感ずるのみである。

カトリック関係の人々の佛教研究の熱意にもいたるところでぶつかった。それは佛教の教理研究に。ルーヴァンのラモット師は語られた。「佛教のテキストをひもどくことは、私にとっては美しい花をめずるが如くである」と。ある若い神父は、カトリックと佛教の接点に生涯をささげるつもりですと語った。かってカトリック内より白眼視された Amida の著者、H. Lubac は、今、ヴァチカン公会議に佛教部門を担当して重要な役割を果している。東西の人の心は一であった。それぞれ東と西とに異なっても一つであるはずのフランスの人々を、なつかしく思いかえすのである。

註

① オートゼチュード及びコレジュ・ド・フランスの講義については、それぞれの Annuaire 参照のこと

② 辻直四郎博士「故 Louis Ronou 博士主要著作目録」（東洋学報四九巻四号）参照。
B. Frank: A la mémoire de Louis Renou (France-Asie N° 188) 参照。

③ A. Macdonald: Le mandala du Manjusrimulakalpa (Adrien-Maisonneuve)

④ M. T. Mallman; Études iconographique sur Manjuśri (Adrien-Maisonneuve)

⑤ 初版は一九二九年。現在は La collection des grands textes に入る。英訳は
In the footsteps of the Buddha (by M. Leon, 1932)
本書はルネ・グルッセ博士より山口益先生に献呈されたものである。